

# 投資ショックと日本の景気変動

R. Anton Braun (東京大学)

塩路悦朗 (一橋大学)

2006年6月16日

## 要旨

本稿は日本の景気循環における技術的ショックの果たす役割を再検討する。その分析の特徴は Fisher (2002)らの主張に従い消費財と投資財の生産部門を分離し、技術変動を中立的なものとして後者に固有のものに分けて捉えている点にある。2種類のアプローチによりこれらの役割を再評価する。第1に Hayashi and Prescott (2002)モデルに投資財部門を導入したモデルを構築しカリブレーションを行う。第2に、競合する動学的一般均衡モデルに共通するインプリケーションを探り、それを基に符号制約付きの VAR モデル(Uhlig (2005))を推定する。カリブレーション結果は投資財部門の技術水準のトレンドは1990年代にも上昇基調を続けており日本の潜在的成長率を押し上げていたことを示す。VARの推定結果は、この部門の技術水準に加わるショックが中立的技術ショックとほぼ同程度の影響を景気変動に与えることを示す。

---

Braun: 〒113-0033 東京都文京区本郷 7-3-1 東京大学経済学研究科, toni "at" e.u-tokyo.ac.jp  
塩路: 〒186-8601 東京都国立市中 2-1 一橋大学経済学研究科, shioji "at" econ.hit-u.ac.jp